

## めがねのまちから、世界の顔へ

小松原 一身  
(株式会社ボストンクラブ)  
代表取締役



福井県鯖江市は、日本のメガネフレーム生産90%以上のシェアを誇っています。

その歴史は1905年、雪深く産業がない農業だけの地元の暮らしを向上させるため「国産のめがねの祖」とも呼ばれる増永五左衛門が、大阪からめがね職人を招き農閑期の副業として地域に広めたことから始まりました。

弊社は、私が25歳の時に勤めていた地元の眼鏡商社を退社し、1984年に起業しました。当時の鯖江にある眼鏡工場の多くは国内外のデザイナーによるライセンスビジネスが全盛の時期でOEM（相手先ブランドによる生産）の受注で産地は潤っていました。

世界には、ファクトリーブランドやハウスブランドで独自の世界観を打ち出して世界市場で支持されているメーカーが数多く存在していました。これが本来のブランドビジネスだと思い、「自分が掛けたいめがねを自分で作って売りたい!」との想いが強くなり、この鯖江から世界を目指すぞ!と強い信念と勢いで『BOSTON CLUB』初のハウスブランドをスタートさせました。小ロットで作っためがねを、東京の眼鏡セレクトショップ1店舗に買ってもらいながら徐々に全国に販路を広げていきました。1996年に、世界に通用するファッション性とデザイン性に優れ、独自技術に裏打ちされた機能性をもつ日本製ならではのめがね『JAPONISM』をリリースしました。スタートから今年で25年が経ち、国内では全国の眼鏡専門店300店舗で販売、海外でも10カ国の代理店との取引を行っています。

創業当初から、「いつかは直営店を持ちたい」との想いがあり、2009年に東京の銀座2丁目に念願の直営店をオープンしました。自分たちが作っためがねを目の前で買って頂ける光景に涙が出るほど感激しました。直接エンドユーザーと接することにより色々な意見を取り入れて次の企画にフィードバックしています。プレス機能も備えており、メディアへの露出も多くなり有名人や著名人の方々にも多く愛用して頂いています。

### 産地や地域とのつながり

福井県眼鏡協会の副会長就任時から、大事にしているのは「産地」としての鯖江です。バブル崩壊後の1990年以降は、中国、韓国から安価な商品が大量に輸入され、産地の出荷額はピーク時の約半分に減少しました。現在は、世界中から高品質で付加価値の高いOEMの受注

により産地の出荷額は500億円を維持しています。1社だけが生き残っても産地ではなくなります。現在約500社以上のめがね関連の事業所があります。それらの企業が協力し合いながら産地は成り立っています。産地があるからこそめがね作りができ、雇用が守られています。

産地の活性化のための取り組みとして、次世代を担う学生への教育を行っています。小学5年生の社会の教科書に産地のPRやコメントを掲載したり、地元中学2年生全員に眼鏡デザイン授業を実施してめがね産業に興味を持ってもらっています。京都精華大学では、日本初のアイウェア授業が採用され、産学連携プロジェクト「あいうえあデザインあいうえお」に弊社デザイナーが参画して未来のデザイナーを育成しています。現在アイウェアデザイナーとして何名もの学生が産地で活躍しています。鯖江市では、成人式を迎える約700人全員に鯖江製めがねをプレゼントするプロジェクトがあり、デザイン監修にも参画しています。若い人たちに鯖江のめがねの歴史を知ってもらうことで地元を誇りを持ってもらい、一度は県外に出て行ってもいずれ地元に戻って来てほしいという願いが込められています。

福井県眼鏡協会では、実行委員長として2014年「めがねフェス」をスタートさせました。「めがね好きのためのめがねづくしの2日間。めがねに感謝」と題して、めがね供養・めがねと音楽・めがねと食など、めがねに関するあらゆる企画を打ち出して日本中のめがねファンの人達に会場に来てもらい楽しんでもらうイベントです。2日間で1万7千人以上が来場する産地の一大イベントに成長しました。2024年4月には、北陸新幹線が福井県で開業を迎えます。産業観光の礎としてめがねフェスは重要な役割を担っています。

弊社では、新幹線開業をチャンスと捉え、作る人と使う人の双方が楽しめる産地にするために、2017年に本社に隣接した4階建ての古いビルをフルリノベーションして『BOSTON CLUB SHOP SABAE』をオープンしました。1階は自社ブランドを販売する直営店、2階は自社ブランドミュージアムとして歴史や技術、素材などを紹介するコーナーでブランドをより深く理解してもらい長く愛着を持って掛けて頂きたいという想いを伝えています。3階にはオーダーメイドにも対応できる工房スペース、4階はワークショップやイベントなどにも活用できるコミュニティスペースとなっています。ビルのオープン後、近くにケーキ屋とカフェ2店舗がオープンしたりと、まちの活性化のきっかけとなりました。

2019年に発足した「36プロジェクト」にも参加しています。地元の銀行や鉄道会社とともに眼鏡産業が発展した地の利を生かした持続可能なまちづくりを検討する事業で産地ならではのつながりを醸成することがめがねを作る人たちのモチベーションアップになればと思っています。これからの産地はモノを作るだけでなく地域のコミュニティを重視しながら地域活性化につなげていく時代になると思います。



最後に産地全体でブランド向上に努め、時計でいうスイスのようなブランドを確立して、めがねは鯖江という「さばえめがね」の地域ブランド化を目指し、将来的には時計のバーゼルフェアのような国際展示会を鯖江で開催できればと願っています。